

ラブライブ!×サンシャイン!! みんなで叶える物語…ファイトで?  
キセキだよ!!

神崎あやめ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ひよんな事から、sの世界へと来てしまったAqours。果たしてこの世界でラブライブを制するのはAqoursなのだろうか、sなのだろうか？はたまたA-RISE、SaintSnowが獲るのだろうか？

とはいっても、基本的には和氣あいあいとしますが、北海道、東京、東海含めオリキャラが大量に出来ます。 $\mu$ 、s、A-RISEはAqoursとSaintSnowのことを知っているという設定になります。

目

次

プロローグ

プロローグ

プロローグ Side—μ, s

みんなで過ごす夏休み編

μ, s と Aqours の出会い

合同イベント!?

9 6 4 1

# プロローグ

20XX年4月某日、東京の秋葉原

「千歌ちゃん？もうすぐAqoursのイベント始まるよ？」

「曜ちゃん待つて。なんかあそこのお店でね、時間を超えるタイムマシン？っていうのがあったんだけど気にならない？」

「それは気になるけど多分偽物だよ。梨子ちゃんもそう思うでしょ？」

「そうね。流石にそれはありえないかな」

「でもね、側面に西木野って書いてあつたけど…」

「西木野！」

「なにか知ってるの？」

「それは本当に西木野って書いてあつたのね？だとしたら信憑性が増していくわ」

「？ うなの？」

「ええ。その西木野はおそらくμ'sの西木野真姫さんの実家の財閥ね。私がまだ音ノ木坂にいた時から有名だつたもの。時間遡行について研究してるつて」

「そうなんだ。でもなんでこんなところにそんなもの置いてあるんだろうね？」

「それはここで今日、μ'sのファイナルライブからちょうど5周年」ということでイベントを行つているからですわ」

「ダイヤさん!!」

「それで幸か不幸かわかりませんが、私達の参加するイベントの参加グループで優勝したグループがこのタイムマシンを使えるとのことでしたわ」

「じゃあ優勝するしかないでしょ！」

「じゃあ行くよ！」

「1」「2」「3」「4」「5」「6」「7」「8」「9」

「A q o u r s」

「「「「「「サンシャイン!!」」」」」

こうして始まつたイベント。私達A q o u r sはなんと優勝し、タイムマシンの使用権も獲得しました。そこで9人で話し合つた結果、μ, sの皆さんがいた時代へと行こうと決めたのです。最初は普通にμ, sの皆さんに会つたらすぐにこちらに戻つてくる予定でした。でも、そんな簡単にこの旅が終わることはなかつたのです。

「じゃあ行くよ！ μ, sのみんなの時代へゴー」

「ち、千歌ちゃん…」

「ルビイちゃんどうしたの？」

「これ、設定が1年になつてる！」

「それってどういうこと？」

「…多分これは、1年経つまで今の時代には帰つてこられないといふことずらね」

「「「え〜?」」」

「じゃあ学校とかどうするのさ〜」

なんと私達は1年間もとの時代には帰つてこられなくなつてしまつたのです。するとタイムマシンについていた連絡機器が鳴り出しました。

「はい、もしもし！」

「あなたはA q o u r sの高海千歌さんであつてるかしら？」

「そうですが…どちら様ですか？」

「そういえば名乗つていなかつたわね。私はこのタイムマシンを開発した張本人、西木野真姫よ」

「真姫さん！」

「ええ、私の入力ミスで1年になつてしまつてたみたいだからこちらのセンター筐体で日付を変更することはできないのだけれど、あなた達と関係の深い沼津、内浦の方たちと函館のS a i n t S n o wはあなた達がこれから向かう私達の世界と融合させておいたからついたらまずは沼津に帰つてみて?」

「わかりました！ありがとうございます！」

「そろそろ着くみたいね私があなた達に言葉を送れるのもそろそろ限界みたい。昔の私達のライバルとしてラブライブに出てきてくれるのを楽しみにしてるわ！」

「はい！頑張ります！」

こうして、軽い気持ちで乗ったタイムマシンで私達Aqoursができるきっかけとなつた伝説、 $\mu$ 、sと競い合うこととなつた……

# プロローグ Side—μ, S—

20XX年8月某日 音ノ木坂学院部室

「ん~?」

「穂乃果ちゃん? どうかした?」

「私達さ、前に真姫ちゃんの家の力でAqoursと出会ったでしょ?」

「あの私達をきっかけにアイドルを始めたって言つてくれた娘たちでしょ?」

「そうそう。そのAqoursのみんながね、こつちに来るんだって!」

「来るのは一体どういうことです?」

「海未ちゃん、それがわからないから悩んでるんだよね~」

「…その説明は私からさせてもらうわ」

「真姫。そうですね、おそらく真姫絡みでしようからお願ひします」

「私達が前にうちのタイムマシンで未来へと行つたでしょ?」

「ええ、皆自分たちや音ノ木坂が未来でどうなつたのか知りたくて行きましたね」

「あの時のタイムマシンが今から6年後のラブライブの優勝者の特典として付いてくるようになつてたのよ」

「そうだつたんだ…つてことはAqoursのみんながラブライブで優勝したつて事!?」

「そういうことになるわね。それとこれは未来の私の手違いなんだけれど、Aqoursのライバルグループと沼津の人たちも巻き込んで今から1年間は、こちらの世界にいることになつたみたい。だから秋と春のラブライブにはAqoursも参加するみたいよ?」

「ハラシヨー! それは楽しそうね!」

「そうやね。うちも楽しみやわ」

「ところで、こつちにはいつ頃來るのかな?」

「向こうを出た時間を考えると、そろそろ着くと思うけれど…未来的私曰く到着座標は音ノ木坂の屋上らしいわよ?」

「それじゃあみんなをお出迎えしなくちゃいけないね！」

「そうね」

「じゃあとりあえず気合入れるためにいつものあれやろつか！」

「行くよ！」

〔一〕〔二〕〔三〕〔四〕〔五〕〔六〕〔七〕〔八〕〔九〕

— μ, S ]

μ,  
S  
i  
c  
S  
t  
a  
n  
t  
!!!

こうして私達μ、sとAqours、そしてA→RISEとSai  
n t S n o wという本来交わるはずのないスクールアイドルの奇跡  
の物語が始まろうとしていました。

こんな感じでどうかな、ことりちゃん？」

「アリス、お目覚めだよ。」

「私達がこっちはいられるのもあと1、2週間だから私達とことりちゃん達、それとA—R I S EとS a i n t S n o wのみんなの思い出をまとめようって事になつたんだよね」

「うん、でももう行つちやうなんてさみしいな」

「それは私も同じ気持ちだよ！だから寂しくならないようこうして小説？みたいな感じでわたしたちの思い出を書き記してるんだよ！」

ともつと頑張らなきやだね！」

「うん！」

こうして私、渡辺曜と南ことりの2人で、タイムスリップしたこのお話をまとめることになったのでした……

## みんなで過ごす夏休み編

$\mu$ , s と Aqours の出会い

私達 Aqours は秋葉原で行われたラブライブで優勝し、副賞のタイムマシンを使い  $\mu$ , s のいた時代へと飛んでいた。

「ところで思つたんだけど

「どうしたの善子ちゃん？」

「このまさつきと同じ場所に出るとしたら大分おかしくない？…あとヨハネ」

「確かに善子ちゃんの言うとおりずら。あんな街中に急に変な機械が現れたら不審がられるずらよ？」

「その辺は大丈夫みたいよ、よつちゃん」

「そうなのリリー？」

「うん、このタイムマシンの到着位置は音ノ木坂の屋上みたいだから。あとその呼び方はやめて」

「でも私達って  $\mu$ , s のみんなと初対面だけど大丈夫かなん？」

「いえ、厳密には初対面ではありませんわ！」

「What? それはどういうこと、ダイヤ？」

「実は、東海地区予選の前後でしたでしようか、 $\mu$ , s の皆さん一度こちらへと来ていたのです。ですがちょうど浦の星の廃校が決まったのと同じ頃でしたので、私と曜さん、梨子さんだけでお会いしたのですわ。その時に Aqours の事は伝えておりますので、おそらくこの頃の  $\mu$ , s の皆さんでしたら私達の事は知つてていると思いますわ」

「そうだつたの!? 言つてくれたら良かつたのに！」

「でも千歌ちゃんはそんな雰囲気じやなかつたでしょ？」

「それはそうだけどさー」

「それに私達だけ会つたつて聞いたらそういう風に言つるのはわかつてたから黙つておいたんだけど、まさか  $\mu$ , s のみんなに会いに行くことになるなんて思つてなかつたからね。でもいざ行つて  $\mu$ , s のみ

んなが私達のことを知つてゐるつてなつたらおかしいでしょ？だから今のうちに打ち明けてくれたんだよね？ダイヤさん

「その通りですわ！会いに行くとなればあの時どうのということにもなりませんから」

「そつかく…でもそれこそ急に屋上に出たりしたら驚かれるんじや」

「その辺も大丈夫みたい」

「そうなの？梨子ちゃん」

「うん。さつきまで真姫さんが色々説明してくれてたでしょ？そのシステムの応用らしいんだけど、sの頃の真姫さんと私達と話してた真姫さんが繋がつてるみたいで、私達が屋上につく時間も、sのみんなは知つてるみたいだから」

「なんだかとても未来ずらね～」

「そうだね！…あつ、そろそろ着くよ！」

こうして私達Aqoursは音ノ木坂学院の屋上へと降り立ちました。そこには…

「Aqoursのみんな！ようこそ音ノ木坂へ！」

穂乃果さんを始めとした、sのみんなが出迎えてくれました。

「うわ～！本物の穂乃果ちゃんだ～！！」

「うん！本物だよ千歌ちゃん！」

「でもこうしてみると穂乃果と千歌さんは本当に雰囲気が似ていますね」

「そうかな？」

「そうだね！確かに千歌ちゃんと穂乃果さんはそつくりだね」

「なんだか穂乃果ちゃんと似てるって言われると照れるな～」

「私も照れちゃうよ～」

「はい、とりあえずそういう話は後にして改めて私達の世界へようこそ。あなた達の世界でも会つてるとと思うけれど、西木野真姫よ。これから1年間同じ世界で過ごすことになるけれど、私達はライバルである前に仲間だと思ってるわ。だから、こっちの世界はちょうど夏休みだし、この期間中は一緒に過ごそうと思うんだけど大丈夫かしら？」

「真姫ちゃんが素直に接してゐるにや!?なんだかびっくりだにや!」

「なつ、私だつていつもいつもそんなことしてゐわけじゃないんだから!」

「真姫ちゃんは変わらないね!」

「梨子までそんなこと言わないで!とにかく、大丈夫かしら?」

「私はいいと思うけど、みんなはどうかな?」

「いいと思うぞら!」

「くつくつく。遂にこの世界でも私の忠実なりトルデーモンを「私も真姫ちゃんの意見でいいと思うよ!」って最後まで言わせなさいよ!まあ私もいいと思うけど…」

「私も賛成しますわ!このような機会は滅多に起こりませんもの!」

「みんなそう言つてくれると思つてたわ!」

こうして私達とμ,sのみんなとの夏休みが始まると思つてたんだけど……

「なかなか面白そうな話をしてゐみたいね?」

「その声は……ツバサちゃん!?」

「穂乃果さん、久しぶりね。それとAqoursの皆さんははじめましてになるわね。私はA—RISEの綺羅ツバサよ。今日は相談があつてきたんだけど、楽しいことができそうね」

「相談つて?」

「8月31日にμ,sとA—RISEでライブイベントをしようと思つてるの。でも、Aqoursのみんながいるみたいだから…」「だから?」

「私達はSaint Snowの2人と合同グループで、μ,sとAqoursは6人×3組で作つてライブイベントをしましょう!」

「「え?!!」」

## 合同イベント!?

私達はツバサさんからの提案のあまりの衝撃にしばらく次の言葉を発せませんでした。そこで、ようやく千歌ちゃんが口を開きました。

「ツバサさん」

「何かしら? 千歌さん」

「A—R I S EとS a i n t S n o wの合同グループってことはS a i n t S n o wの2人はこつちにいるんですか?」

「ええ、あなた達よりも少し早くこつちに来たみたいで、同じようにこの話をしたら快く受けてくれたわ」

「最初は状況を理解するのに手間取りましたけどね。こんな機会二度とないと思うので、お受けさせていただきました」

「聖良さん!」

「そして私達は既にグループ名も決めてるの。その名は『D i a m o n d D u s t』」

「お~。かつこいいね! 理亞ちゃん! つていうかもうそこまで決まってるの!?!」

「ええ。それと今回のライブイベントは、UTX劇場で行うわ。さらに、シークレットゲストも一組交渉しているから。ちなみにそのゲストは、おそらく矢澤さんと小泉さんはよく知ってるはずね」

「私と花陽が知ってる?」

「まあ詳しいことはまた後日書類を送付させてもらおうと思つてるわ。皆さんはどうかしら?」

「…私はやりたい!…こんなチャンス逃したらもう来ないよ!」

「千歌ちゃん…そうだね! A q u o u r sとしてはやりたいです! μ,sのみんなはどうでしようか?」

「どうする? 穂乃果ちゃん…」

「やろう! 絶対楽しいよ!」

「穂乃果がやるつて言うなら私達もやるわ!」

「じゃあ決まりね。…ああ、共演予定の相手も名前くらいは言つてお

いたほうがいいわね。その名は『Genesius』よ

「「「『Genesius』!?」「」」

「こちゃん、花陽ちゃん、そのGenesiusって有名なグループなの？」

「有名よ！Genesiusはスクールアイドル界のバイオニア、私は正直な話A—RISEじゃなく、Genesiusを見てスクールアイドルに憧れたんだもの。4人組のアイドルグループよ」

「私ももちろん知っています！特に今年は長いGenesiusの歴史の中でもトップの歌唱力、ダンス力を持つ新入生が1年にしてリーダーを務めていることで話題になっている九州最強のスクールアイドルグループです！」

「そんなグループがあつたんですね！……ってルビイちゃん？ダイヤさん？」

「まさか、この時代でGenesiusの皆さんにまで会えるなんて感動です！」

「そうだねお姉ちゃん！ルビイたちの時代ではμ's、A—RISE、Genesiusの3強って言われてたもんね！そのGenesiusに会えるなんて驚きだよ！」

「Aquorsの皆さんの中にも知っている子がいるのは驚きではあるけど、Genesiusが参加するかどうかはまだ未定だから決まつたらまた詳しい情報とともに連絡するわね」

そう言つてツバサさん達が帰ろうとしていたときでした。

「連絡をする必要はないですよ。私達も参加させていただきますので。といいますか、せつかく参加予定グループが揃つたんです、この場で打ち合わせしません？」

「そう言つて入ってきたのは…」

「まさかここに来てくれるとは私達としてはありがたい話だけね」「自己紹介が遅れましたね。私はGenesiusでリーダーを務めています、天羽聖奈あもうせなといいます。以後お見知りおきを」

今話題になつていたゲスト、Genesiusのリーダーでした。で

すがそれよりもG e n e s i sのメンバーや  
面々は驚きを隠せないのでした……